語林類葉

さーし　八

い三

ホ 2
502
8

門 [illegible]
號 502
巻 8

語林類葉巻之八

清水濱臣輯

佐行 さの部

二言

さう 喪

拾遺雑冬 あらのまゝにあらて侍りし法師のもとにつかはしける うつほ ○

さけ 鮭

和名 ○字鏡 ○今昔 ○保憲女

集詞　さけといふいをの名也くまとし○今昔廿八 卅五 枯

鮭ヲ太刀ニ帯ケテ

さし　颯々

栄花 月宴 五十五　さとみさらけい○同 同五 十七 女房をちからとれ

くさしつらふ○同 五十八 さゝめきしのゐもあへに○宇津保

条佳　え給へせぬ事なひみさしつらふ事のみ○後撰

恋四　秋あけてこえまをゝ人見てさゝやきけまし○栄

花 玉臺　さしはゆん出侍つるをあさむしを イザく 紛 ○

ささ　造之○いほりさゝに 分類蓋條委注

宇津保　こしうけ ねの葉をくほりなとして○

させ　虫名○古説 つるさせをはきりくにといふなり 蓋の一名とに

後拾遺序　あきのむしのさせるふしなく○

さぞ　俗語のさまに近し

万代々 為家　涸代さしさそさしかりし 夜半の田上河も淋しかる秋の

○

さし

大和物語 はさとゝなりし所にもうら 遍照カ家ヲイヘり ○

さび

中務内侍日記 月はあけゆくまゝに光もさびまさりぬ ○同

いかにの人かくさびて

山家下 いせしまや月の光のさひかうらはあかしにはにぬかけそすみける

○古撰 可考 近来(コノコロハ)波憂(ウキ)身裏気里(サビ)奈良山之青木之下葉色哉替礼留

さ両様

源氏論義跋 思ひもうけぬ御不様月とゝめて ○同 貝弥作 弘安三年也 ○太平記 主上笠置 御役落 異方様カトオホ 先帝船上 エタル男女チマタニ立ナラヒテ ○同七 陪（先帝ヲサシテ）上様ニハイマタシロシメサレ候ハスヤ ○ 辛 同十八 金崎城落 上様ノ事ハ義顕ノ一宮ヲカレシテイフ ○同 卅五 北野通夜物語 十ト関東様ヘハ御十ケキサフラいスヤラン ○著聞十五 つゝやかなる御不様にもきこえにけり ○同十七 御不様なし 異にいあやしき事なりけり ○中務内侍日記 後宇多 弘安三年 中

将そさしく多かこそ侍へも年ころに○同　清水様みち清
そきも中かしくられしきに○今昔十六条　十六　女倉代
ヲ聞テ父サマニ語テ云○同　廿九条　曳張テ上様
ヘ将行テハ省ニ将入ヌ　ウヘ様トヨミテ公儀ト未心カ　○同
廿六　十八　谷様○増鏡　新潟より　そうしさ侍るその
人つうそさへのめり○同　山のをみち　西園寺さ侍みそ一
こゝろはおほしいたるまゝなき侍うはさひなる○
玉雑一つきぬうへの状さ侍なり

さや　豆ノサヤ也

宇つ保　後京君　つけ侍めをそよまてあてみいとほとも○

さら　更の意ぬして　俗言のさらにちらきそ
宇川保　こうけ　さるめかしきことさらにもよへきこそれ
し○同　同　さらにちるめかれたるき人のみえぬ○
源　浮舟　さうゝりて称人さそこるし
後撰恋三　題志らず　融太政太臣　時平之
あちきなくおもの青山波さらん事をいさらに思ひなはる

さを
万　さをとぬる足の多そとりおひしあまのちいさをしとそいふ

○源 若菜下 なはさまあしろくさうけなれてそなる
さしにほひたる○同 末摘 清色はさまあて○今昔廿
七巻 真サヲニ光ル物有リ○同 同 真サヲニ光
タリ 野猪ノ怪ナリ○

三言

さいし
和名 冠帽具 笄子 蒼頡篇云簪笄也 釈名笄 音鶏 此間
云笄子上 音如才 係也所以拘冠使不墜也○宇津保 釵 俱
うみをけみあはりさうそくあきやうなりよそほひつくさい
しとも思ひて日へいひてきて○讃岐日記 さいしこと
思ひはあらうつる物のさしたてたちはなさもとる
いと嫌をあかくまなり○栄花 大川花 女房これ撥あけ
てさいしさしたり○宇津保 蔵本仲津白浪 清くし
浄なしとて色もなひたりたち先きさいしとて思ひあらん
くしとも○

草座（サウサ）
和名抄 ○栄花 音楽 二三人にて
こえたちいさし座なといふものことなる○

さうし　冊子　雙紙　草紙

拾玉集恋書　雙紙○万代雑五人の雙紙をこそ

せう〳〵

さうし　精進

栄花　月宴　廿七　さうしして○

さえた

万廿

やちくさの花はうつろふときはなる松の九要太をむすはむ

さゝらふ○

さはる

徴正記物語　旅のけいさはりの風こそ國にならさはる

注云さはりは玄○さいふる時を　風にあるところ

につけて都そかくまる

いふ事ゆゑと古事記傳　のさはりさまたげと[illegible]つけ

のさはりたちて田ならるふをいふなるへし○

月の｜｜｜

野の｜｜｜

山の｜｜｜

さゝ

栗のさかて

後拾雑一　逢夜看月　杉家

[illegible]のほとりちかきつきの月のさかりいはそ[illegible]

○野のさかり　山のさかり　うつ保

さきら　舌（サキラ）　河海○吻（シタサキラ）　宝物

源　鈴虫　まへの世にさへしらぬあまりきさきらを

いとらうしていひつけたる○河海　寛（エタケキ）舌（サキラ）弁舌也　細

大弁舌也○湖中開云物語一部のつくりてなめさき

らいとかしこくおもしろき○今昔廿八　卅五○聞キ吻

百テ物可咲ク云フ者ニ○

さけぶ　猿ニカホクヨメリ鹿ニハ

○

後拾遺秋上　長能

高砂野につゆとふ葉をさけふ磯をしらぬの花に露や乱るゝ

サヽメカル　サヽメノミノ

さゝめ　旧説笹也或云水草○さゝめかるといふはさゝめみてさしとなる

千五二　右大臣

朝露のおきて家をさかれてさゝめかる綾ぅ袖をかくいぬるしを

同五　後拾

さゝめかる菖蒲の沼に色川るも　あめのをゆみちを袖はぬるゝ絶

散木同

堀初百首　仲実

月きよみあけ野の原の夕露にさゝめ絶なくちかしさゝめぬれぬ

夫木廿二同

月詣集　五月五遠行　源宗光女

さゝみをもにさゝめのみのもしらちたゝぬれくちぬ野原をの原

夫木　権大納言実家
旅人のかやのみちをきてしくれ　ぬよひめくりぬる月はかなしに

新六　この　知家
村雨に野辺のかやをも分行はうち露てみのそきかへる

夫木廿二　野　道因法師
しもかれ野のかやか下にふし鶉ね覚わかれぬ身は猶にけり

同廿二　衣笠　新六　歎　同
夜もすからかやのみしかき人とはなれもあるさめかなも袖そぬれける

久安百　小大進
あふことをかやかみのかさけれはかみのかきくうしめしきかな

夫木　寂蓮法師
山かはのもとにて刈しかやめしそかやもの関にあまそ刈行

〇大和本草云小々妻山野ニ生ス賤民ハサヽミノト云蓑ヲムスブ草也茅ノ類也又コレヲアミテ筵ニツクルヲカヤムシロト云〇太田

大洲氏云即神農本経ノ茅根ナリ旧説カヤトスルハ誤也カヤニ似テシナヤカ也今云ツバナ也春フル子ヨリ葉ヲ生ス叢生ス三月頃其花出即ツハナ之野人葉ヲトリテ水ニ漫シ中ノオヤ筋ヲ取捨テ其跡ニテ蓑ニツクルコレヲサヽミノト云〇

さゝら

笹花　御着裳
ふえふきさゝらしてふるつきさはし

のはい〇今昔廿八ノ七サヽラヲツキ朳(エフリ)ヲ差テ様

々ノ田楽ヲ○職人哥合サヽラスリ○撰集抄

さしみ

康富記 文安五年八月十五日 云々 二献冷麺居
之鯛指身居之

サシキドノ
サシキ

さしき

業平 なかしつゝ 二条のさしきとのにまゐりたりぬ○同
玉篭 おほかのみこと宮みかし後いはさしきとのに中
納言とのまゐりたに○

さゝらし

源氏竹川
ちそのていときはかしとやさゝらしらん下にはほへる様の御気

○業平 浦々別
一方

さとね 里居

狹衣二上 四十 はさとかのほとにも

さなえ 小浪

万代秋上 源季廣
たちかへし池のさなえに枝おちて ねそくそのなかほなる

堀百 氷 師仲
山川はみなこほりしてきゞの羽風のさえにおともきこえて
○長明無名下 諸浪名 顕昭にきゝ侍しかば
みをはさゝ波 あらきをはさき浪の名とこそ
唐琴何もなき時に立ちて月あふぐしとこそ侍
詞花 好忠集
川上に名をとゞめし水なれやせのさえにさえ
支木二春氷 為家
さく 裂（サキ） 分（ワリ）ノ約
新六
いたしてつらゝあみのさえきつゝあらふ道にもみだれじ

○後撰雑三 志ゝくに侍る女の男に名立てかゝる みち之
ことのれんある人にいはさなけしと思侍りける
かたはらもさわとさわかれんうき名をいはぬ水の泡に流れん
○西要抄 まるほどにあけくれ出ゐんとのゝさえく
こともいまはその事て我を思ふ事も侍らぬ
うちけうしきことゝぞ

ざゞろ 俗語也○今俗ダヾツヒロイといふ○坐廣
長明無名上 あはれざゞろくとなん侍○

さぼに
散木七恋上 寄中恋
よる袖をおもちくさ露にさほぬれてさほれてこそん君そ恋ける
堀河家集
山ら川の道にさほせるあせ頃ゆいとほしける也将亦
曽丹集

さほ田 早穂田也
十二上 田
かた山のほきのさほさを打返し毒もさ雪のみしにつくらん
○

さうし 肆。字彙既刑陳其戸日肆

竹取 西川さろして船にさしきんと思ひたちけるといふ○

さるの日 申日。子日の例に同じ即初申也
林葉一 春日祭
ちくうきのいろくきまいりける春日山さるふかいさる日と神もえすらん
○シカアル日トイフ意ヲカケテヨメリ○

四言
さいつゑ サイツチノサイ同意カ
宇津保 俊蔭君 ゑまのあしるたきてさいつゑつきて○
和名抄

さいちい　采配カ

蜻日記上 卌四 人のほしかりしさいちいもちはべりしかば
とらせたりし○

さいもて　寂果

枕冊子十 廿八 さいもての車にのりたる人は○榮花 後畑
又さいもていふもなきくちなし○

さうして　たちして人。ちかくしてといふ意也

さうなく

竹取 髪あげなどさうしてきちやうのうちよりも出さ
ず○愚管抄三 病うきうになりはべりたなれば中
納言なる人の内親王まいりて 子細ナリ也此書ニ才ホシ○

さうしみ

古事記
○万葉十六右傳云 中略 爾聴夫君更娶他妻正
身不来徒贈裏物○落くぼ四 二十○源氏末摘○
同幕木○同総角さうしみの御さまなど 白文ヲイハヘリ

さかめて　草書

源 少女　さかもみうほとてさかうちにうち返せ○

さかみ　逆髪○サカカミモサカミリモ髪ヲ逆ニトリ尻ヲ
逆ニツカミテノ意也

竹取　さかみをとりてかなくりおとさん

さかしま(ルイ)　逆尻

竹取　さかしまにうき出て　からのおほやけ人にあはせて
はちみせん○

さかなか　坂中

隆信集 賀
さかなかにむすひし　みちにしくかやまのほりおちぬとやかなしき

○

さか葉

栄花　玉のうてな　あまたたひにほりけるをさかしき御代にもえあひけ
まうてし　中略　僧正御よてかをいさ人まうてていのちのまし
らまやせ○

さかしだ

源少女 ゆふのまかひいふんさしれとのあてに○孟
下場 ○狹衣二上卅三 ちゝのそかしさつやまかひいれと
いもらむあらしかし○源夕影○同空蟬 さかひ肩め
ほとゝいらきなけみ○浅茅四

左義帳（サギチヤウ）

四季物語 正月 六月 ○つれ〳〵草○弁内侍日記下建
長三年正月中略十六日にさきてうさうましにを
まとしゆかりしかとも○

さくしる 鰢

源少女 いとさくしるあとゆけなる人（コシクサカシキタルヲ云）○狹衣四上四十ウ うちさくしるゆえびれと
いしなけれ○

さしあふ

新古雑一 さしあつまあつてなほりて○業平朝臣の
ならの川さしあひとのさらかしく○続後撰恋三 よみ人
ならの男さし合とまて会あつてあはれの事ならぬに
なりける返りたに 読人不知 ○玉葉秋下 紅葉ゆらんせ

らうしとて行る日さしあかりてのちにりきこ○

さしくむ

遊糸日記 きのふのもしきくみちの四へいて思ぬ時

いとあさましけれはとし人はさみけると心へきなと

にもあらにゐるこそいとくさしくむるにいとくるしく

うれしきことそのに〔?〕

源氏 若菜 さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心はさはきやはする

○遊糸日記 人の家の酒へちかきいけこに八月ま〔?〕

月の影うつるをみる女とも見つけてたにおほろ〔?〕笛ふ

きて行人あり

後撰恋四 哀なりうちみるの哥を御前にさしくむなり〔?〕

いかにつけの野中の清水みるからにさしくむそのは〔?〕

○玉小櫛云 うけふ日記の哥にさしくむ〔?〕といへる

てさしくむといへるはのさしくむ○サシクムハ物ノ

サシカヽリタル意ノ詞ニテツレニ涙クム意

ナイヒヨスル也○源 桐姫 さしくみに〔?〕

またかはりてなとあはしきくもさらにしらく

りきこし○河 サシヨリニ○細 うちうけ〔?〕

ぬ詞也○源 宿木 あはれうちにつゐつきみはあはれと

さしくしは柊いとほしきなと 涙ニハヨセス○

さしゆ サシハ詞ニテ揩之

栄花 浦々別 ならの川さしゆつかをきにをしはきし○

さほうだ 丞 ささ々絶之

源 夕霧 おほさらなりさてさほ々絶はてしあまし○

さまよへ 謫○流落

宇治 保 そうけ そのあはうみくまなくるめにゆしや

さほつて○通證十二丁○大和物語 百五十段 さてしか うちさほつて○

さてしも 今俗たのしチドウダトイフ意ナリ

栄花 若枝 さてしもとこゑきこえさせたまひて○

さしもちみ 里住

栄花 十オ こゝてぬ事○

されく 然莫○サナセワノ意

続世継 うちきゝ さはしゆうてのきぬしのきぬをはまえん

○菜蔬 浦々別 ニウ さはしとさはしはやしまふへきなしお

らん○

さんやけ 今俗ニイフモヤシモノ

和名抄菜羹類黄菜崔禹錫食経云温菘辛是人

作黄菜常所噉者也 黄菜俗云佐以一○延喜式

内膳漬春菜料蔓菁黄菜五斗 料塩三斗 粟三斗 ○うつ川

ほ 祭使 くらやのくろきうちさんやけにつまみてさんやけ

のしるしてうえてきたり

拾遺物名 春風のさんやけ やれはまさして花のかなしみをほころひぬらん

さゆなけ

源 若菜下 あちはひさきまなけきなもえさゝへき

さえ〻し

続詞花

○今昔廿九 四 サメ〻ト哭ク

隆信集 昔冠ニ さえ〻しとなるそれしふる涙のそでくちもぬれてはつるらん

山家上 雪のまさえ〻しと雨きかゝる我ぬれやあらしに袖ましき

○続世継 花のあるじ さえしらはきえひて ○サメく
ハシメくノ轉カ某サマヲ某ミマトイフ例

さうほう
散木 山かけにさしほつうたさたうあひなれなれて行へしれし
支木

競 荘子

○今昔廿七 廿二 吉枯テ膝ヲヒタル人ノ手ニテ
有リ○淡松三あけのおいくもえにそのきらけ
にさうほひてをしうしは○サラハサレタル意
ニテ相通也サレヒハ辞也

猿楽
散楽

さるがく
宇川保元開 いふ際さるがうをして見つつ乞ゑつ海し
○源女 かしうはしくの乞てとるうはうとも枕に
入ていれ中なかもきかしゆちえん際うはうけにさるがう
うかしく見えしけ丹人のろけゐるおかし 大学氘 イ ○枕
冊子九 ヌオ さうまいもをかしいつき絶うしう花ささる
うう際しうちし○桑菅樹五康彩際しいふさるがう
くろ乞その際しみさしとめつう乞て○散楽○猿
楽 河海 廿女 ○三代實録貞觀三年六月廿八日辛未

天皇御前殿觀童相撲 中略 種々雜伎散樂透撞
咒櫛弄玉等之戯如相撲節儀○同紀仁和元年
十月廿三日 中略 奏音樂種々散樂○東鑑廿五
十二 人々及猿樂○同卅六 二 猿樂○雲州往来
云又有散樂之態假成夫婦之躰○同異長九之
滑稽白藤太之猿樂○

サルカウ
サルタチ
サルく

さるがうの
拾玉三 思ふこと何そとさへ人はいふさるかうにいひもなさなん
○源 椎本 髪さるかうかるほとにあちなるかるへし

○同 東屋 わかゆきさはにさるかうかみ○同 初子 髪の
ちそそさすいしほそうてさるかうにかきなさいとおかしく
けみ○同 同 髪のかうのちきしさるかう扇をみに
うちきたなるも○枕冊子 廿段 小舎人いちもさく
て髪のうるえしきうちそきさしてうたに コレハ髪ヲスケ也 ○
保憲女集 詞 池のほとり花おほひさしたる女のほとりさうし
らうた○宝物 国議上 すんちもおいさるかちなる

さるかうし
今物語 やそて清水にて局をかりしさるかうしあけたに

九

さぬきのかた 文記 なり ○讃岐日記 帰らむときこしてかへりまかり出るを

きこしい

さをとめ 五月處女

栄花根合

さをとめの山田のしろにおりたちて いそけや衣へひちのたもとを

○

五言

さいたつま 假字未詳

後拾遺 春下 藤原範孝 三月かすか野の若菜をよみ侍る

野へにまいる 宮人のかすかの野へに かきわけて さいたつまかな

○能因哥枕云 若菜をさいたつまといふ 又若菜をつまとも
もいふ ○喜撰式云 若詠草晩 さいたつまといふ ○同
書 長哥 文句 五七五五七五七七 さみたれつゆ ゆふゝ若菜
にかよるへて あふ哥さはるまて ゆたにおりあけいい ○袖
中 十二 十八ウ

二条皇后宮大弐集

見わたせは さいたつまとそ なりにける 野もせの露に あさ露をみん

同返し

さいたつま むかし袖をぬれ 若菜のおなしあさつゆに きつゝ

堀川集 夫帝

さいたつま もえいつる はるにつゝむ 若菜つむへみしるへき

万代春上

忠度百首

さいたつま たかうゑしかは みそのに 藤かすにきなれける

夫木廿二　源顕国
さいさいつはうらもかくれなし志かまの志めをはなき海にかゝる

玉葉恋上　後□井入道前太政大臣
春日野にはいうちきさいさいつまつはなちるとものかき

○

さいはらる　先曲　又　才曲

枕冊子　脩十七　あ謌なりけれはまし獨さいはらるとめて
へてさし出い○濱松あ謌二されたりさわしらんおき
たまかしさいはらしき色にうたひうちていうあて
ありや○才枉ト云説ハワロシ按ニサイハオ
ニテマクルハ清音ニテオノ詞ニツケテイフ

俗語也俗ニ人ヲ云マクルヽ又追マクルナトヽ云
マクルニ同シ捲ノ字ニ意近シ又俗ニオハシ
ケルニ云ニ近シ

為忠百首　形慶

さしきいる　サラキ　未詳　イル　射し

万代雑二　さゝらの内を　参議親隆
さしきいるかほとふ人のまとをはまたかさしてあてるさゝらの月

○

さうかさいし　箏

體源抄云箏ハ我朝に傳たることハ仁明天皇の御
時に遣唐使の准判官掃部頭貞敏廉承武カ娘
に傳たるとそ或ハ内教坊の妓女命婦石川の色
子筑紫の府の山にて唐人ニ是をつたへたるとも見
えたりと云へり○

さくなんさ　石楠草
拾遺物名　如覚法師
むらさきの色にはさくれともさくらの草のゆかりと人もちそみまし
○清慎公集　横川にてさくなんさをとて　哥同上
同之
さくら花雨にさくなんさとみハはなるとかそとなりにけらし　さ

続詞花
さしくして　小貌
業花　為隆長ふ　いかしてをさをつくしぬとかいさしく
て○

さしつる　棹文○渡に舟ノさせてと
うたゝ稀　ゆきゝの人あれはあて船をさはやかにさしつゝ
なほといふときさすせしうへし○十六夜日記
ちあらせるわたし川にてあほくの人わかゆきゝにさし

うつろひもなし○

さしこえて

拾玉七 廿七

さしかへて

大和物語 さしかへいつかともなく見えし○宇治保

後承君 そまをさしかへていそぐとて○ コロ卅ニ 引ト云ニ近シ

永久四年百首 肥後 いかなるきみの袖なれさしかへておもふ心を神さそうけつる

拾遺恋二 よみ人しらず もしはなくさめよとてさしかへてかみたもかくる人とそ見ゆ

○源宿木 浦さちにさしかへてはかよはれなれをかへ○

さゆかし しは助辞也

拾遺恋四 兼盛 さしかう人の心をみつる雨のゝ浦の方にやいくへかなるらん

公任集 古本忠峯集長歌 きてもみて花をさゆかしちらしつる風のをしめ人の植けむ

新詞 泉式部 をかしみとりもさしかうん根さへそこをたにける

山家集上 凡河落花 うち拂ふさゝ袖かゝ袖にさし鳥のうちけの空もさゆかしかくる

拾清集上 山桜桜さるうせのあさゆかし花をさゆかしとところかにける

山家下 どうかうし空はさゆかしをまつきてみるへもかくなかる月

ちかひへきとのをさゆかしあつむとも君かなさひをえらん風かは

拾玉三
兼て思ふすゑはさかきのもとの世にはいとふをこそしる花か
新古雑下　資宣
おしこきをさかきの葉に付しつきはさしつらんのわきそ無ける
保憲女集
あさあけのさかきをきえて川みるむすめすみそなゝきほる
月詣二　大納言時忠
ことせをさかきの花に付きて色なほきものをみるなりしけれ
○宮川保　春日詣　上達部にはたちさかきかくして
○同　参詣　君かたちさかきのさかひまつに○栄花　玉鬘
かられてしけいをさかきうつろせまゐて○同　御着裳　十二
さとのさかき　里ノ刀祢
後拾訛諧　世中さかし　けるる時さとのさかき宣旨ん

て祭つるみやけのさかきをふるけれんつきとほる
ゆきとし　長能○

さかきのみ
源氏賢木
さかきをもてゆかしきといふ緑もかはらぬいろはしるし

○

さかきちらし　六言
榊　拂ト云　コヽロカ
新猿楽記云吉蒲大臣七佐法王之道習傳者也
サカキハウヘ

さかなしき世
拾遺雑秋　遍昭
ちりにしもあるみ白ふらんたとをへしかもとよいひさかなしき世に
後撰恋一　よみ人しらす
みちくらぬまていひぬるさかなきいへさの浦のあとしちゝそゝま
○大和物語　をとめのうちろさかなしあしきことをいひ
さかせれまし○

さしゝ人
源蓬　深のとおめてのさしゝ人○同　浮舟　はるいさちちか
うさしゝてをへ色○

さみゝゐた髪
源氏　ほたる　あ川うゑしきさみゝゐた髪のゑゐゝゝなとも
ちゝて○

三衣匣（サンエノハコ）
和名抄僧坊具　○箕兀　音楽　二三人
くしてゑゑをさき座ゆしいふとのもとゝゐゝ○

七言

さうきのいまい　未詳

拾玉四
あさひさへさうきのいまい町見えたる屋の棟もさえみえて

○今浅草市にサヾツキトいふハ雛市の意にて雛市して川らうある菓桃くだものを取多くならべうれしおりそれをいふニ

さくさめのとじ

後撰雑四　さくさめのとじ
いはれんとひしちゝをいのちにてまつにきえぬべしさくさめのとじ

名残和名撰　八雲御抄　稲田姫
目も見えぬさしはなのさくさめのとじをよそにきゝなんのうみなれ雨と見ゆ

○

さくさみの神

山家下　題しらす
みをかなしむあまう河岸に波うけて見えぬみなもさくさへの神

夫木十三同

十一言

三十六町一里

玉う川南十二　卅六町を一里と有るを或説に織田，大臣の世よりのことと云い、竟孝謙御部の国士の道統に近江路の道を御よりて十三里とし美濃の国井をむさしへ十四里ある也その世のさき絶し同

将他書を考へし○太平記巻十三

龍馬奏進の条　今朝の

外の刹に出るかたん岡をとえて西の刹のくだりに京まで
其道をてみ七十六里とあり○拾芥抄中田籍部云
卅六町為一里卅六里為條 印本ニハ上ノ里ノ字磨滅シ下ノ卅ヲ
此ニ作レリ古本ニヨリテコヽニイダス○

十二言

さらけものにしてうつく
栄花 月宴 三十三 ○拾遺哀傷 女院御八講捧物月の形して
うすのうしを作りてよみ給へる○

しの部

一言

し
詩 からもろこしのふみをも詩といへり調のかたちなんともきこゆ
ちかきよしうたいあへるへし
枕冊子十二 六ウ 声めい王の眠ふらをもとろうなといふ
詩をあつらう出したる是ら朗詠禁中鶏人
暁唱声驚明王之眠 漏刻策ノ文ニテ 都良香ノ作也○

二言

ほと
尿○ ミトいヽミヽトカヨヘリ女陰ノ古言ホトヽシ今
ホトヽ云ニ同例カ
散木集雑 うちこもりにふけてあるきけるにかきち

ちりしいてましなる人のうちとけてはなしけるをきゝて花
ちりつきをとりもりけるしたちて入にけりその日をしける
かたちなるそへゆめなきめにかゝれ花と浮ることもなかりけれ
○続詞花戯咲　なら坊の後ろにかゝりける女房の
こもれる花のちりしの清薪にて花とみしなりけるを
あやうりのさいわゐの花るを見て　女房
みな坊ならの都のやへにて花と帰るをのかゝはきかず
○菜花　四十　とり花　清花と形しにぬまてもうきしけれみて
おほきましける○冥異記下条　卅八　矢　十条　○宇川保　花開
清ふとたろをなちありなりを浮清をとに返ほちあそ

しまる○同　同　ちか君に花をくみまゐらせけり○同　大なおほとの
花よにぬるまじわいぬ○

花へ　花ノーリ

渡拾雑四
花のへとよちの下葉かきつめてふめもとをらやちらんと行むし　祭主輔親
○袖中二　廿オ　引綺語　枡云属の花へのこまうをとぬき
てらゝ花へをいひ浴にいまへしけるく
夫木廿七　仲正
あけの山へとめて花とさ紀なるちりめの花の花へに形つこい
○

しほ

散木七恋上
あまのすむおかはる潮いはたにあふつきしほもかきしときかな

万代冬　仁和寺入道二品親王
みなと江やはる水のまとゐきえし月の出しほに千鳥なくなり

千五百番　鎌栄
ふゆの月の出しほのふねとふぬるらし

續後拾冬

月詣　顕昭法師

宇川保集冬下　松風に波のしるを
ふるみちもてかくる浦の松いつまてしほにうち寄せむ

同あて
人しれぬおもひつゝ袖のなみたにしほしみちぬらす

イクシホ
幾入ニ　イクトキ　往時トヨセタリアテ衣ノ入

門ヲナケキテ深中将ノヨメルナリ

夫木卅六
あまのすむくもしきなかにあはれなる浪かよふぬらし海なり

續古今秋上　後鳥羽院
霧のあはれなるもの烟かよせて月あかてしほのみちくるまにかな

○千載序　わかのうらのしほに

全葉　催起
さすにさとめるしほの浦ちさし

菜しほ　サヽノ時。

○暴風　アカラシマカセ　紀　○陌　ヨコサノミチ　ヨコシノミチ　紀　景行

○歘　アカサマ　アカシマ　雄略紀　○謨　ヨコシマヽラス　應神紀

○

汁 しる

ちか川保 条注 くさやめくらうきさいもけれはまことさしや
けのそらしてまてきまらう○ 玉勝間廿条寺之長卿
記於姉小路三位亭有汁又之内蔵頭有招事汁
張行今の世にも田舎にて汁といふことあり客もて
飯をとしおのか家より持来て其家にハ菜と汁を酒
うけてあるしはくさたと同にして汁講といふと云

メテシレ ワヒシレ シゴト シレモノ

しれ 癡

しつ保 さうけ そしまてうち○ 続世継 みなきの松 な
てゆつきんいちまことかつといひ人まん ○ 方丈

しらくも

記 かく見苦しまるをみそあらくかしまさい○土佐
日記 あしよあるみしりそ甚てゑひしまて ○今
昔廿八 一極キ白事ニハ非スヤトテ○同 廿三 同
郎等ノ行白タル有ケル糸見苦シキ虚口ヲナ
ム常ニ好ミケル 中略 本ヨリ行白タリケル男
ノ○源 少女 おやのまちうるさうめしこといふて○
枕冊子 四段 はとしうとそさましきめてしきをかくれまて
○同 廿八段 さらしくをかしき君達も随身なきいとしれ
らし─○

三言

シカフ
シロヘ

しからむ

続詞花雑上　国房
山川の野ぢのはぎもうつろひにけり川せに草をしからみかけて

山家集上
みまくさの原の若草しからふとてふしもあはせぬしからおもふらん

夫木二　とみ人之しけ
しからみてとみ人のいるもしらすきはかものうみのちかきの宮川原

堀河百首　俊頼
しらなみにあてつめほゆかうみをしらへて君かみまくさ引

○八雲抄　しからふいふとかしてゆるありと

しのる
吐
しのも祐上　とのしらりゆくとてかえのしくの見通へ

○今物語　しからみちらしちて　○盛衰記十七ユ、しりシカリ音ニテ　○讃岐日記　ひとそ見て。しか(ハカ)らせられ　せらへとこそ○

しきし

枕草子七　六ウ　あれとまつる紙をしろきしきしに
つきて○同七　十五オ　くまくてしとふしきしのあつきうえ
しろきを○同十　十八　白きしきし　○続世継　花のあらし
しきしうすきの類似とうきしへ　て○同　ちくの序子
見るしのしきしにいれとうきしもふ　○字川保　紫侯う

あさか川つゝしむとふ 中略 いとゞ悲しさまく
てらしてあかほしさき しきしにうきふ○

しきら
常花 むかしのうつ楽の破のうゑしきら
あはれ宮のしきらそいとゞさらえぬる 宮への名みなきつゝ羽袖て
○

しかり
万代集 藤原経衡
こゝろ人ゆゑ松のしかりは苦衣こゝさぬるをみ風にふきける

曽丹集
苦しきのちとをしのしかりみなとまそ杉本にかゝにほともしらぬ
○

しそく 紙燭
竹取 まへ川しそくしてさくのひとはえんとこそ ○

しくじ 舌利
狭衣一 下十二

しさゐ 下絲

忍ひの清水の日記　伊勢尾の下淀る家のちかく

一〇

しづる　俗言ニハシカチルト云ハ此シヅルノ上略カ

為家続後百首　仲正
あさゆふに松のしたはの雪は人目をもさしてしつるしそ降る

同後百首　頼広
うちはへてとまる　しつりやしたしき　呉竹の　ふし毎も　またきとはきそれり

同　親隆
ちりかかるのきの　あけの　しつれまし　かくそ　しつくたふし　のちのをしは

同　為忠
ふる雪に　あふ坂山の　ゆき車　しきの　しつれに　袖そ　ぬれぬる

同　為家
さくらんはやみ下道はふきてけ　風に　立ぬ　しつるなれ

散木　行路雪
雪ふかみ　しなしたる　みきの枝なれは　きえるなかに　しつるしげけき

〇按云　しづれは木末より落る雪を　しづるといふ也

為家後百　頼政
夜とてや　ゆふきのかけの雪とけて　おちくるまきの　しつるなるらむ

〇

しとゝ　鳥名

字鏡

壬二集上
山里はこのき林のしとゝ人なれて　雪ふりにけり　奥山の細道

夫木　源仲正
春はこのき林のしとゝ　さほぬれて　まつくら山の　山さと

〇

しはの　芝野

中務内侍日記　しはのゝおもてかりそめの色々を○

しはや
壬二中
夫木十四同　後九条内大臣
ましはかるゝ秋のしはやのまかきにも　まきしはる露の衣ほしけん

夫木卅　いほ　名寄廿　入道太政大臣

夫木卅四
しはふかきかたよの里やのうちはてゝ　にほとめぬきしろやいある

○

しはゐ　芝居
隆信集下 五十三
都人あきにいる秋のしはゐして　うら風ならて　おとつるゝものもなし

夫木九
兵多院親王家五十首　野宮左大臣
しはゐする山かけの夕すゝみ　杉おとはほたる蜩なく声

後葉集　攝政
花ちりの庭をみるにぬきみたる風まつちかきの色ひの芝ゐに

○

しはる　縛
宇都保　祭使
くりやめしはりつけてうしい○

しいし　張物ニ用ル具之

拾玉四 四十
をとめらかいさつめにあかしひらかもの しいし ちかひは 鳥はきもかくく

○行阿假字遣　　○和訓栞

しびと　死人

知顕抄　しびとは目をとぢきにたる○

しひふ

萬葉 四十四　うらしの別
清暇のしひかましひまして○谷川氏いしゐまして

しゐて しゐまじの○
特といふ

しぶく　契云童吹之○風吹(シブク)也○東野州云しぶくハさしいるヽ也

新古冬　家経
たつせねしぶく ちかたにとみちもの かゝりて くもる大井河原

夫木四　後鳥羽院
花さそふひらの山かぜしほりて 桜にしぶく 志賀の浦松

清輔集 夢 疑舟
まきのまの雨にしぶくつり舟 わかぬる とし まなこそしぼれ

○歌季集　海邊
きしうへの園みし しるてらすらきし しかの山　名所

をともまてしつみ 部にいまして○

しぶし　渋

夫木二　長方
雪の花 しぶくきちめく しをちの らとあり 春のあけぼの

○業平とへの　しぶくみてまつせるひぬまじい○源 廿女

うへはしふくみおはしまするを○

しみゝ　繁々の意にて出に入るを後あい深意にをなす

山家下

雪ふかきしみゝにしげくかきさきの通りなきおうの山

○

しもや　下屋

う系保とのけ　しもやに雑仕してあつまるを○

しふね　草名未考○草ノナニミツキトイフハアリテ和名

卅ニモ見エタレドミフルハキヽオヨハズ

隆信集物名　しふね

のりたてしことにおしふねと打ちきいへばしのぶ

○

栞　しはひ　スコシ様躰ヲミテノ意ナリ○ヒコミラフ　比部引

シラフノ時カ

しの毛　補上　そをしうちしはふきすひて○源松西　あなむ

らへるくの○同三　きぬをさゝぬうはにゐまくし

をてかしいまひて　そちしらおぼえまひて○

しらこの　白髪

老ーー

恥ーー

新古雑上
○
きにけるしらかは花もさかりにはるふのあさきに雪と見えける　堀河左大臣

しらむ
源頼政　河海しらぬとあり○ミリヨワクナルナリ
あはれしきりにありてあはれしいとしらむ
にんらうきとこそや○拾遺はしらぬみしもひ小橋はしら
ぬにとなり侍る考へし
○
しら袖
狭衣　後目
─下十　しらめ花のうれしさはいまつ○源　多郎

しらめに見るあはせて○同　さとらし　女君　しらめに見る
らせて

しらや
後屋
小馬命婦集　海女のしらなにいあまりて　ともなひして○
今昔廿七　十一人皆静リテ後屋ヘ出ケルニ○

葉しろし
拾遺冬
たのめしく　松の葉しろきよしの山いくよつもれる雪にかあるらん
○金葉冬　経信　ゆきの葉白─○

しをり

六帖山

しをりしてゆかましものをあひの山いかなり雨とふりしをりせよ

浜松中納言物語　河陽縣后

うき身にはしをりて入し山の何とて人の身の秘きつらん

○今昔廿八　九　鷲ノ山ニ坐セシカハシヲリテ

尋子ツヽモ登リ玉ヒナマシ

しをらしう　四言　哥ニハ常ニイヘリ詞ニハマレ也

しのゝ秘上　しをらしう御けしき給ひておもはせしを○

栞　しをりみ

夫木七　定家卿

玉川に月のしをりみうけて行入らぬさきぬまうなれぬかな

○堀百　萩　匡房　秋の―――○同同　仲実　秋の―――

しきじん　式神

玉勝間　宇治拾遺ニ式神をつかふといふ事あり

その川原のさとれる見きし晴明が仕ふをとて

ある晴ち人を殺はるゝとあり○新猿楽記　仕式神

造符法○大鏡一　花山条　晴明ノトコロニイフ　式神一人内

裏にゆかましやれまし○宇治拾遺二十七しきにうい
なるにはせうはいしき神にこそあまし又云陰陽師と
かうしうてしきをふせなりけるを又云かのまなりてや
しきにうて死侍りぬ又云しきふせさせけるもとを
い○盛衰記十晴明カ天文ノ渕源ヲ極テ十二
神将ヲ仕ニケルカ其妻職神ノ貌ニ畏ケレハ
彼十二神ヲ橋ノ下ニ咒シ置テ

しらぶち

宇川保 祭使

しらぶちにふかきなるなかいふ宇川に

○同 同

○塵添壒囊抄一色弗（とつけ）○

獅子舞

菩薩 音楽 楽所乱声えもいはすおもしろきにしゝ舞
ともいつまてありいてあちむかひてまいるほと○増
鏡 くみの日うけ 法会のありさまもや社のうへは 鎌倉若宮祭ヲ云
舞楽田楽獅子からしふさうえ雨につけなるてし
をしろうし○著聞集○

しるこうい

したの衣紐上　大将こそ　したかしの色はへまし　いとらきとも
かゝる世のかなめと　なるへき　したうは　なまくし　何につけても
なみもしきと人なるを○源　若菜下　大将もまる世のお
ほしなるへき　したをまた　なまえて○同　総角　さとへく
おほやけの　はうしろそと　なるへかめる　したうは　なるを○
盞　下地と同　○源　橋姫　はこ川うらし池の　したうはなに　ゐや
うみとえをもはらんしいまゝ○　廿五ヤウハ綺様文榮　耀みてうるへのかまりを云ふ
○源　胡蝶　池のんしたりるへき　したをこらしたきちらえたて
せまふ○

雪の下風

巣した風
山家集上十七
拾遺愚草下卅六才　さしのうすまその雪の下風

したくみ
竹取　仕計（シタクミ）　たくみなるへき　したくみをしたくしとも○

したゝむ
源　松風　諺
そのことゝかくそしく　したゝめく　ほどにいふにも○
さいはひして　したへ○　したの紐下　清の　したゝめなりして

○

栞（シヲリ） しをりふし　下臥

うちかふし　後撰恋二 康資王母　○雪のかふし　夫木七 顕昭

しらま川　下心に待へ

大和物語　其秋しもはらはきしたれ○

しもろふ

宇治保　そしらけ清てつりしも川きしおきもひし雨かふて

入て○渓　梅枝　ちらきはしつりしものあほひ

為忠後百そしらる　おもはに袖をしつりてやもりをなきぬ　かたきおき　仲正

○大和物語　うちのしつり見のきそ○涙　松風　ほりて

くしつりをせるるしも○

してうち　壁（ミラ）涛

後拾遺秋下　さらふけて衣してうつ声きけはいそくぬ人も袖まきけり　伊せ大輔

月詣　九月　かる衣してうつちのそらしし山見まへもそくかへの声　勝命法師

玉二集中　山風にみえらけてしろ妙のころもしてうつしつのの神人

拾玉集六　しつのめの枯尾しのまつ松がねに衣しもしてうつし久しふたき

同一
月うけみさかきしでうつおとさえて神まつらくは秋の山里

同三
しでにふくかもの川風さえふけてところにさとるあけ鳥のこゑ

同同
いがきにいのるこゝろのさかきしでふきはらふ庭のまつ風

同二
神垣やしでふく風にさそはれて玉垣にちらく紅葉の錦

同四 芸

保憲女集
きりしほるゝはしきまとしいもちきぬしでうちあかせ夜ともなかせ

新古神祇 入道関白太政大臣

異本拾百 袖衣 永縁
斎垣に衣さしうつり秋のかとや ねおもひ人の友とはなるらむ

続古神祇 入道前太政大臣
春日山きしてるしでのおとさえて夜かたの月に松風ぞふく

新古神祇 慈円

夫木卅四
山家下
かしこはるしでたれこのうへ又いけこそとおもふところに あさもと 堊

○万代同○玉葉同○ 木綿ニテ ノ引也

後葉集 行家
山河の神わたし川なをやすしきしでうちおもしろしそくれる

○

しとうや
月詣雑上 春日の社に 御幸 侍りけるにしとうやのまへなるにて

○中務日記 くまあて しとうやみ待ある○

しらたま　品玉　新猿楽記

今昔廿七（四十）懐ヨリ白キ玉ノ小柑子ナトノ程ナルヲ取出テ打上テ玉ニ取ルヲ見ル人可咲気ナル玉カナ○

しらなみ　白波河

源為　差見（ミナヤカ）

いとをしけにしらなみ（メイ）なかるゝもの○

しらいと

字鏡　纏残纏織餘也志称糸○今俗機ノ織アマリノ末ノ糸ヲハタじ子ト云ニ同じ○しじ子ハしイナト同語カ

新六　衣笠

しらいとはしら川のしらけ糸くりかへしいく夜になりぬらん

しじケケ子　○式十五　三十一ウ　纃白綾○

通韻

しらくも

後拾遺　参議国房

いかなれは雪ふりぬれとしらかとりかへしのしらくも山透るらし

○林葉　四　かへのしらくも山

しほこほり

都土産　しほかまの浦にいつきぬ神体はやうしほ
かまをしるせしなり○

借家（シヤクヤ）
康富記　近所之借家○

序跋
愚問賢註序　并良基　○都のつと　同　○空穂物語
巻末　彼書　即日記　しの序にいひて作るやうなりしとて　文
書　その詞をかりて作る女子もしるしきたるなり　ハコレハ間ノ入唐日記
ヲ漢文ニテカキタルヲイヘル○
ナリ此頃ノ日記漢文ナルベシ

しらあわ　白沫
拾遺愚草下　雪とのみおりるしらあわに袋きえて枯るも高き名のいはこ
○

しらうを
源氏川　ふるき野のいつかしせぬ宿にしらうをひさまたく
かほとに○　巴州　しらうを　○今昔十九　三条　飯ツモ皆
泥形ニメ踏ミ成タ喰シテカフ音ヲ聞テ○同

廿八 四 追ヒラカヒテ ○ 枕冊子 物のあはれしらせ顔なるもの

苦にえしらてありし ○

しらまほし 覚え ○ 奥のさしきを座のしらまほしき事 ○ 異なるもの
なもし同しきの部

山家下
山里のしらるゝ声々にしめてはかなる風の音かな

○ 宇治保 すみけ たに思しく久しくならぬりけたにしらしる

しらすな 琴 リシト クリシ ○

しりぞく 退

元治二年百首 隆房
いつとなく風にしりそく色々の花なかりけれは春を惜しむとぞ

ミルトコロ

○

しるし 知行

伊物 むかし男ありけり 奈良の京かすかの里にしるし
してかりにいにけり ○ 玉葉雑一 民部卿信近 情のみか
その家にしるしをしるしのはてて侍るを ○ 千載旅 尾張国に
しるしのはてて ○ 今物語 十帳 歳のあはれにしるしなし
なきになりて侍る ○ 菊花 しるしのあるをこふせみなみつき
かめりしといてりてゐて侍らぬもあけとさらせ 惟仲の仲
の中納言のしる所にはなせなりへきに侍らしめある ○

今昔十九（廿三条）般若寺ハ傳ハリテ知ル所ナレハ堂ノ未申ノ方ニ卯酉ニ大キナル房ヲ立タリ○玉雑二二条院讃岐伊勢国にしる所侍りけるにうつりすみあるになりて鎌倉右大臣みうらくそあつまにくだり侍りけるに○今昔廿七（卅三）木幡ト云所ニ知所有ケレハ○同卅一（八）隆経朝臣白地ニ知所ヘ行ムトテ○続千神祇

しちとる（師 取）

藻 紅葉賀 舞の師ともみなとらにそへてかしめをとりつ○

五言

しあやまち 爲謬

葉花 日宴 八ウ いとみしくあさましきことゝもしあやまちりへつめるなれ○

しけめゆひ 繁目結

続世継 色給の しろしけめゆひの水干きて○

しそえしほ 紫蘇醯

高野日記 うちとけしきにあそのいふたらむしほれぬらん
とのゐそく

しとけなき
小町集
しとけなきねくたれかみをみせしやはたかくれたるけさの朝顔
公忠集
ほころひてまねくたもとはみえしかはしとけなくそ見てもむすひ
丈木土高同
○栄花 三十八 もとの花 しとけなくしとしなくもなし○源 真木柱
しとけなくうちきなとしとけなくして○

しなたれき
長明無名下 なをとふかくあんして家にゐて一首を
いえるもつましうなり○

しひつもと 椎本
源氏巻名
たちよらんかけとたのみし椎かもとむなしきとこになりにける哉
栄花花の玉
奥山のしひかもとをしたつねきてこゝのへをもとめつる哉
○

しほとけげ 又しとゝに

狭衣二上 いとしほとけゝれて引かつきたひなる○栄花
うつの 源氏はしの袖もしほとけ（けち）れて○同 うのはい うへ女
ちへのさんきの源袖もしほとけゝり○同 月宴 廿八 五月の
さえもにも衰れてしほとけゝらし○

しんとう 衣服をもちゐるものをみなしんとうといふ 伊呂 字可考
長明無名抄下 さるほとゆる高陽倉のきぬぬきとて小袖
にしてきるなとはあらん○

しほの門

文木六 禖子内親王家歌合 中務
ところせくおみきの浦るしほの中にかへは笑ふ うち浦る一所
○

しほのほこ
中務内侍日記
ぬれ上の月に人いさむるものを しほのほとりや思ひ消ゆるらむ
○源 榊 うしほのみかいとて所しあえて○花鳥云
まの物語四巻にしほみちの詞あり○巴州神社の詞
○

尺八 シヤクハチ

続世継 三 内宴 後白河 尺八といふて ふきならすふえさへならぬ
はじめて ふきいだしたりしうけたまはりしこそ いとめづらし
きことなれ ○源 末摘花 たちまちきさくちちの笛

宿曜（ミユクヤウ） 陰陽師にいふ
菊花 くさ 多巻 宿曜にとみもくはそくのさいふてたまし
に○源 桐壺

春画（シユンクワ）
異本能宣集 男女けうあるところかきたる所に
うろめいたるまゐるをかほして みどころあるけしきなるを

○

しりうごと 後言 ○俗云カゲグチ
源 廿廿 あはむしくりれしりうごとやほめきこえつくし○
枕冊子 十 廿二 あはらしりうごといしはいきこえむ○源 若菜
下 廿 四 ○同 廿廿 一秋のしりうごとのくらい○

しりかくる
源 須磨 しりかくるまふ所しきをきめみゐちかくと○

しろかね　知音

都のつと　宗久　いまはしらなみありしよりて○雲井のみ

のそらさかの色にしらまゆるけしきに見ちなりて○

源氏まつくし　しらなみあひてふちつゞきて其ほどろそきさへ

なる人も見えて○同　うけもの

しらまみて

菊花　月宴　五十三　うたゝてしろかしくしらましまみて

しろいもの

和名抄容飾具粉文選好色賦云著粉則大白　和名

之路岐毛乃　○枕冊子　九十一条　五月ばかり月もなうしろき条　ひさきぬ君え

ろいものうけて○同　三段　しろきものの衣のきぬしあつき

白きものつけたる人は○職人尽歌合　○しろいもの

○四季物語　正月　しろきものの紙におしろいつけたる顔に

しろく○二条大皇大后宮大弐集

白花　シロキハナ

新古雑上　五月ばかり物へまかりける道にいとしろくにほ

しの花はさきたるを見て　卯の花をば人にとひ侍りけれ

うちわたすをちかた人にものまうすわれ そのそこにしろくさける花 小弁

○

六言

しらぬもの 次第モ无

枕十 和七 オ 輦のしるしにもあれましものゝさらし 今ニ トモ

ナクト云ハ此 ○ さしあれ しるしにもあれうきつゝ

次第ノ時カ

まくし

しての田をさ

古今

催馬楽

業平 清輔 蒙

和泉式部集

さつきやみ しもいはく時鳥 しての田をさはいまそなくなる

ふる里のうき狼にめもてつまいはく しての田をさいさうしせん

しとろもとろ

堀百首 基俊

ちりしけるいはるかる思ひのうちかさねのしとろもとろに

林葉三 古笹首

後拾遺一 良暹法師

あさ緑みだれてなびく しとろもとろ あふくしもなれとよひなせん

六帖 うつせみ

千載秋上

挟衣一

さらぬだにあきのころもにたちかはり袖ぬらすにかはらぬとそ

○源 梅定

おもひ

保憲女集

み月山しりくものうへに時雨ふるとてあきにもみて

○源 横笛

ほとのおもひ出るにくもおくしてもかなしきを

つねにきゝてもたゝゆひめしかへとも○

しなぬくすり

竹取 けふあるは不死の薬入たり

同帝

あふこともなみだにうかぶ我身にはしなぬくすりも何にかはせん

○

しらかともに

偕老同穴 毛詩

新六 あひおもふ 光俊

いきせんしらかともにとちきりてし我のおもひのかはるらん

中務内侍日記

さらぬだにしらかいともにとしへぬるその昔のことのはの月

ことはの月

枕冊子 すさまじきもの しはすの月夜〇源若菜下 なつかしの
月は人にまかひてそてふれんかむし〇新猿楽記雖致
気装歎無愛人宛如極寒之月夜〇空穂 蔵開中
しはすの月夜のすさまじきにかゝるとのい 梨壺の いきほひ
かきとを 〇源 総角 月さし出てうちおいらくのけさうも
源内侍 しかる世のしはすの月夜をかしともおもはし出まゝて
〇

さよみのさと 一の
今川貞世道ゆきふり
さよみのさとのかちよ

秋出る〇

さもおもえ
古今 みよしのゝ山のしらゆきもとふし秋てのあきけのさとのふるさとも
拾遺愚草上 同雪 みよしのは又あしきまかるみよしのの山のさとの雪のふるさとも
新勅撰 入道前太政大臣 ちるふへき難波の芦のさちかはかる秋 くれのふるさとの つゆもえ
続後拾上 順徳院 みよしのゝ山のあきちのきらしはさもの ふるさと なかしめしも
万代秋下
拾遺愚草上 道のへのおく人とさえきあをひ草 秋のふるさとし枯そてそめる
〇契沖頭書云古今集の秋のふるさとは秋のふるさ梅

ちと雨ふんしるを降端とんなる説にあいつきぬ

いふう○

守宮神

菜花 花山四十一 守宮神うしろ木の清涼へまて○

しらしのきぬ

万代を 大炊御門右大臣家小佐。（右カ 渡カ）

神雪にしらしのきぬいかしかとをとけるをはけりのしらし山

○

しろき清具　御産の調度白きを用

菜花 花山十四 しろき清具とも○源 若葉上 ないの上も己

もりまへ白き清きそくしるひて○河海 御産

當日上下着白装束九夜改白装束後尋常也

九条右丞相記曰女房等各着白裳唐衣 冷泉院降誕御

記○菜花 三十 ういへの○

七言

しきしほの道

万代雑二伊勢太輔 しきしほのみちもたえぬつきせし

はしつむつらんしらまし　後撰源門　○家集元○伊勢太
輔集ニアリ○玉雑五ニアリ
二条太皇太后宮大弐集
いそ思ふ心くしをれん古のあとかくらんそきしほの道
○同　又一首アリ
夫木卅六　定家
若の浦埋るゝ名をハ隔ともきされの波やあきしほのなみ
○千載序　あさきしほの流も筆にまかせて○

したかへのつま
狭衣三下　廿三
玉しひのかよふあたりにあらすともむすひやせましたかへのつま
○袋草子○源氏

シツノマロヤ

しつやの小菅
千載恋　俊頼
さみたれの日をふるまゝにかりつゝもしつやのさしけくちやしなん
同恋四
新古今　後徳大寺左大臣
なきさふくしつ川のあしやのかりのねをあけくらしつゝはるくきける
催馬楽

しのをふゝき
悪管栅秋風のたかしきをとそ野分かとの類く○催
馬楽　律　逢路　あふみちのしのゝをふゝきひきよせよ

ちりひちことぬりんしのをふききさんならや〇縣居

云篠吹風のたけしきに雪ゆきたふるとひろ

散木
わきぬる竹のそよみなみせてしのをふきく人なかるらん

夫木 鹿 後京極摂政
ならしばのしのをふきさ衣きたにつましともらぬを寝のし

千五百番 百家
ふけきつるささの庵うちかきて衣は寒ししのをふき

同 小侍従
ならひともなく寝ますあふちのしのをふき人そうらし

夫木九 大坂御門右大臣
ならしおそたち井出をあふちのしのをふきしのむしに

袖中抄

〇

しのふ人しのふも
栄花 玉のむらきく
しのひつるのしのふ人衣はふるい みよせの秋にならやなき人

〇

八言

しけ野の箏桐
宇川保 条侍
ならず世に人のむかしはしけのさいせかた
そあらんみそしやさおいしおいまへらんさら(?) ひとりあい
ゆきこあまり給そきん人もころろゆるし
しけにとのつきはもくそへんらくしろてとも深き人

なるらん○

しはすのはい　宿光之拜

思ふ日記 大将しはすをつきて宿寺のはいと思ひ

らうたえ弘みも 故殿にあるにうき涙ぞましけるとうぞ

○同 しはすの人てさいかしをなし○

九言

しほえをぬるなりけり

源 頼之 世にしほしそめるなりひの人のなにあり○ 濱松

三 しほしそめる人い

十一言

正月おさめて

今昔十九 廿一条 修正十ト行ニモ必ス此僧ヲ導

師ニモシケリ其行ヒノ餅ヲ此僧多ク得タリ○

同廿八 卅六 无動寺ノ修正行ケルニ七日既ニ畢

テ○後撰雑四 あにさきりなるみ そりなる人のつかれ

おくて正月おさめひて出る暁に○讃岐日記 一年

の正月に 修正 きゝてあさおもふとてうちにさぶらひしを○